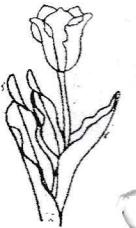


# 君に勧む 金屈后

会長 飯田 龍鷹



一、謹んで遠藤先生を悼む  
今冬は、格別に寒い冬であった。  
遠藤先生を失った千代田岳精会は、  
北風が躰を吹き抜けるような厳しい  
寒さを感じた。遠藤先生と千代田岳

岳精流日本吟院

# ちよあ

第 1 7 号

平成 1 5 年 5 月  
千 代 田 岳 精 会 弘 報

平成十五年度岳精流指標

# 礼と節

精会、それは、教場発足、支部昇格、千代田岳精会の発会式、そして毎年の温習会と、其処には何時も遠藤先生の祝福と激励と笑顔に満ちたお姿があった。昨秋も又、旧臘十二月の千代田温習会にご来駕をと、懇請申し上げ、例の明るい「ハイ承知」とのご返答を頂いたのでした。  
更に十一月三日、奥伝審査会では、会員夫々に、温かいお誉めの言葉を頂戴し、又「身体に気を付けてよ」の心配りもいただきました。その先生が先に逝かれてしまいました。  
誠に痛惜の極みです。  
茲に、ご生前の並々ならぬ千代田への心配りと、ご厚情に会員一同深くお礼申し上げます。どうか永えに安らかに眠り下さい。  
二、花開いて風雨多し  
厳しい冬だっただけに、開花を心配したが、例年通り、桜は爛漫と開いた。今年から全会員の吟行花見復活、吟楽部は用意万端を整え、四月五日を待った。桜の名所は九段から千鳥ヶ淵、そして市ヶ谷台へと続くが、「花より団子」とは先人の言、もとより、酒。吟、花の会である。吟楽一途である。然し天は全てにくみしてはくれなかった。目指す会

場までは土砂降りの風雨である。そこで、皆さんご存知の于武陵の「酒を勧む」の五絶の名句を想い出す。その昔、宗家や遠藤先生とこの詩を吟じつゝ、川崎の馴染みの店を歩いた事を。

君に勧む金屈后

満酌辞するを須いず

花開いて風雨多し

人生別離足る

さあ金色に輝く杯、心を込めて一献差し上げよう。なみなみと注がれた酒。これを前にして、もう十分だと断わりなざるな。花が開いたら嵐が来るのは、この世の習い。本当にまあ、人生というものは、別れに満ち満ちていることだ。

表は花の嵐、正に花も嵐でもある。酒もたっぷり、精一杯楽しむ雰囲気は出来ている。なみなみと注がれた酒杯の情景は想い起こすと楽しい。こうして吟楽は続くのだが、詩にもあるように、満開の花には嵐がつきもの、酒を飲む楽しみも、やがては別れ別れとなって終わる。それが人生さ！と達観した口振りの裏に、無限の哀愁が漂う。  
漢の武帝の秋風の辞の「飲楽極まって哀情多し」は同じ趣向。更に井伏鱒二の名訳、コノサカズキヲ受ケテクレ ハナニアラシノタトエモアルゾ サヨナラダケガ 人生ダ。

千代田岳精会の組織が変わりました

# 吟楽千代田の実現へ向けて



二年後に迎える廿周年、会員数二百名への拡大を目指し組織の一部改編と草加分室の正規昇格、新任の正副教場長、部門担当が決まりました。これにより機能化が図られ、より一層の体制の充実が期待されます。

◎丸の内第一教場

教場長 井手 樹風

副教場長 大熊 清風

◎丸の内第二教場

教場長 岩崎 泰風

副教場長 吉川 鍾風

◎同 草加分室

教場長 太田 翠山

◎東陽町教場

教場長 耳塚 昇山

副教場長 武田 弘山

◎清水教場

教場長 村上 恒山

副教場長 大槻 銚山

◎神田教場

教場長 林 吾風

副教場長 町田 湧山

◎ハザマ教場

教場長 鈴木 重風

副教場長 城戸 稲山

副教場長 佐藤 甲山

◎錬水教場

教場長 菅原 克山

副教場長 加藤 錬山

◎丸の内女子教場

教場長 菅原 琴風

副教場長 穴倉 紫山

二、指導室を指導運営本部と改称、研修部門と連携し研修実務を担当。

磯田龍真(副会長)

井手樹風(丸の内第一教場長)

岩崎泰風(丸の内第二教場長)

吉川鍾風(丸の内第二副教場長)

三、担当分野が拡大している研修部門に三担当を新設し担当役員を置き、会員の研修計画の立案、教場の運営を支援する。

鈴木重風リーダー(ハザマ教場長)

村上恒山サブ(清水教場長)

菅原克山サブ(錬水教場長)

福島越山サブ(神田)

城戸稲山サブ(ハザマ副教場長)

◆演奏担当 会員のコンダクター演奏技術の向上研修会を開催。

荻裕山リーダー(東陽町)

町田湧山サブ(神田副教場長)

西川宗泉サブ(清水)

◆詩歌研修担当 漢詩など吟詠する

詩歌の知識向上研修会を開催。

渋谷辰山リーダー(東陽町)

前田道山サブ(東陽町)

山口隆泉サブ(丸の内第二)

◆コンクール担当 合吟出場者の選抜等コンクール全般の指導。

林 吾風会長補佐(神田教場長)

村上恒山リーダー(清水教場長)

城戸稲山サブ(ハザマ副教場長)

四、事業部門 会の諸事業の準備、当日の設営全般、弁当手配、終了後の懇親会を、事業毎に総括担当及び担当教場を決め担当する。

各教場のスタッフは廃止する。

大田晴山リーダー(東陽町)

大田翠山サブ(草加分室教場長)

山手英泉サブ(清水)

◆昇伝審査 井手樹風

総括担当 (丸の内第一教場長)

担当教場 丸の内第一、東陽町

◆全国吟道大会 吉川鍾風

総括担当 (丸の内第二副教場長)

担当教場 神田、ハザマ、錬水

◆温習会 岩崎泰風

総括担当 (丸の内第二教場長)

担当教場 丸の内第二、清水

五、吟楽部門 親和部門を改称し、

会員相互の親睦を図る吟行会等の

行事の計画運営を担当する。

林 筑山リーダー(丸の内第一)

町田湧山サブ(神田副教場長)

西川宗泉サブ（清水）

六、弘報部門

八田玉泉リーダー（丸の内第二）  
渋谷辰山サブ（東陽町）

七、婦人部門

菅原琴風リーダー（丸の内女子 教場長）  
菅原紫山サブ（丸の内女子 副教場長）

八、事務部門

八尾葉山リーダー（東陽町）  
八田玉泉サブ（丸の内第二）  
菊地駿泉サブ（東陽町）

九、業務委員会

鈴木重風委員長（ハザマ教場長）  
赤根惇山副委員長（東陽町）  
山口隆泉副委員長（丸の内第二）

□演奏担当年間計画

目標

- 一、各教場2名以上のコンダクター演奏者の育成。
  - 二、伴奏が出来るレベルの研修内容
  - 三、温習会で成果発表を行なう。
- 実施内容
- 一、演奏指導は磯田副会長にお願いする。
  - 二、参加は経験の有無を問わず希望者とする。
  - 三、研修会は年4回次の日程で行う
- 六月廿七日（金） 十七時三十分  
九月廿七日（金） 一  
十一月廿一日（金） 十九時三十分

十一月廿八日（金）

□詩歌研修担当年間計画

- 一、テーマ 李白、杜甫、王維の盛唐三大詩人とその作品を四月より各四回取り上げる予定。
  - 二、参加者は希望者とするが全教場よりの参加を要望する。
  - 三、研修会は毎月第四木曜日十四時より二時間
  - 四、教材 教本天、続天、地の巻
- コンクール担当
- 岳精流全国吟詠大会は男子チームの出場と決定、昨年の武道館大会の参加メンバーを出場候補として、三月六日より九回の練習日を設定、順調にスタートした。
- 各会場については、担当より連絡します。

岳精流全国吟詠コンクール  
寿栄の部

町田湧山氏（神田）五位入賞

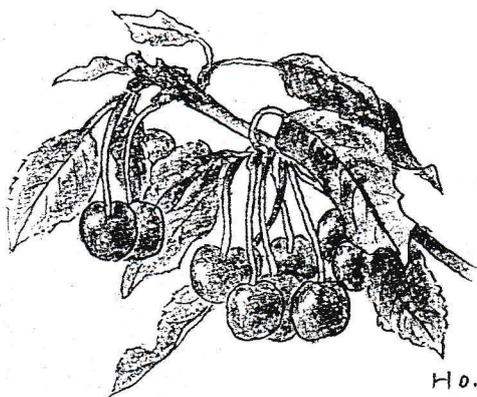
三月廿九日「サンワークかながわ」で開催の、第四回岳精流全国吟詠コンクールは、総勢九十七名の代表が全国から出場。千代田からも、前号で紹介の四氏が寿栄の部に出吟したが、並み居る高段者出場の激戦の中、町田湧山氏が実力を十分に発揮され、見事五位に千代田として初めて入賞されました。（出吟者廿名）  
おめでとうございます。

全国吟道大会合吟コンクール  
今年も男子チームが挑戦

研修部門のコンクール担当の初仕事は、六月廿二日開催の岳精流全国吟道大会の合吟コンクール。男子チームが挑戦と決まり、昨年の武道館大会で八位入賞メンバーを指名、全国吟詠コンクール予選二連覇の林吾風神田教場長を先導に選び、上位入賞を目指して三月六日より九回の特訓が行われている。

昨年までの出場チームは、十人揃った練習が殆ど出来なかったが、毎回候補者ほぼ全員が出席、今年も意気込みが感じられる。厳しい切磋琢磨で最高の合吟が披露されることを期待しよう。

吟題は「雪中の雑詩」市河寛齋作。



星野久泉 <清水>

若葉の如く瑞々しく伸びよう

## 詩心と高い格調を目指して



春雨が降って百穀を潤す二十四節気「穀雨」の前日、土手の桜も散り若緑が眼に映える市ヶ谷で昇伝審査が行なわれ、これまで最多の百十七名が審査を受けた。内訳は男八〇名女三十七名と会発足以来、男性優位の千代田として女性会員が初めて三割を超えた。また寿栄会員は廿六名であった。

審査は横山精真宗嗣、山城龍和指導本部員の両先生。

終了後、飯田会長から「両先生より過分のお誉めの講評を戴いたが、私も前回に比して格段の上達と思う」と挨拶があり、山城先生は「初心者が上手でビックリしました」宗嗣は「習うより慣れると云うが、慣れたらもう一度習うことが肝腎、車の運転も同じ事」と異口同音に中高段者への奮起を促し、戒めの講評だった。

昇伝審査を顧みて

ハザマ教場 原田 政敏

初の詩吟昇伝審査に臨み、所懐の一端を述べさせて頂きます。最初宗嗣横山精真先生に厚くお礼申し上げたいと存じます。私は、一月にハザマ教場に入会い

たしましてまだ三ヵ月、その間飯田会長、鈴木教場長のお二方より懇篤なご指導頂き、今回昇伝審査に出場するようご指示を受けました。私としては驚きと不安で一杯でした。吟詠の極意は、松口月城作「岳精会会詩」を熟読玩味し、その精神を「真善美」に表現する事が真髓と信じ、鋭意、誠心誠意吟じ終えました。横山先生よりの講評では「転句に力が入り音程を狂わせた」と。失態に恥じ入るばかりです。

私は旧制中学卒業後、信託銀行員二年で徴兵、久留米歩兵第四八聯隊に入隊し、ソ満国境の旧満州国牡丹江省東寧に配備され、その後上官の勧めで奉天予備士官学校で幹部候補生を志し、軍事教育を受けました。

配属された班長が詩吟に精通していた為、毎夕点呼後、号令調整の特別として詩吟を実施することになり、何ら精しい説明も無く、班長の声に合わせて合吟しながら会得しました。僅か九ヵ月でしたが「金州城下の作」「爾靈山」「九月十日」「九月十三夜陣中の作」「城山」「大楠公」「不識庵機山を撃つのが題す」等練習しました。そのお陰と思えますが詩を吟じたり、他人の吟詠を聞

ことで五体の充実感を覚えます。若い頃の音質と比べようもありませんが、精一杯腹の底から声を出す事が私の健康管理の最良の策と感じております。諸先生、諸先輩吟友の皆さまのご指導、ご鞭撻を頂き精進し、上達を目指す決意でございます。

お手柔らかな講評

清水教場 山口 勝

私が詩吟と出会ったのは、長年勤めた会社を退職し、気持ちと時間に少しゆとりが出来た昨年暮れの事でした。元々歴史や故事に興味があり、漢詩を唯読むことに物足りなさを感じていた矢先、偶々清水教場を知り入会。そこで、声を上げ詩吟を通じ歴史に触れる喜びを知った私は忽ちその奥深さに魅せられ、今では生活に欠かせない楽しみの一つになっています。

さて、今回の昇伝審査は、私にとって初めての教場外での経験、しかもトップの出番。些か動揺しながら待ち、ついに開始。無我夢中で曹植の「七歩の詩」を吟じ終え、横山精真先生の審査結果を耳にしたとたん、ようやく緊張から開放されました。「初めてですわね、結構ですよ、ただ全体にもう少し滑らかさが表現出来れば、なおよろしいです」との誠にお手柔らかな講評でホッとしました。

縁あって出会った詩吟。これからも末永い良き趣味として、また教場内外の方々との出逢いを大切にしたいと思っております。

はじめの昇伝審査  
丸の内女子教場 藤原 寿子

昇伝審査を終えた今、熱いココアを飲みながら、ほっとしている処です。

今年の初めのこと、四月には昇伝審査が予定されていますと先生からお話がありました。入会したばかりの私には他人事のように思っていましたし、仕事の都合で思うように練習が出来ない状態でした。日が迫っても先生のテープが頼りの練習でしたが、八十五歳の母が興味を持ち、私を教えてくれました。私は人さまの前で声を出すことは苦手でしたが今回のことは良い経験でした。

詩吟は、むずかしいですが折角の機会です！これからは先生方、先輩の皆様のご指導を得ながら、詩吟を楽しむことが出来れば嬉しいですよ。

吟の奥深さ  
草加分室 渡邊 千英子

「吟は人格者に習え」この母の一言が吟への興味の一步でした。吟と云うと地味なイメージしかなく、習い

始めた母が何故そんなに楽しそうなのか不思議でした。自分で体験するまでは。今回初めて分かりました。腹の底から声を出すということが一種の快感だと。詩を学ぶということ、礼節を身に付けるということ。練習するにつれ、奥の深さに魅せられました。

今回昇伝審査を受けて、吟に携わる人々に触れることができました。品のある方々の生き生きとした姿を目の当りにして、あの一言に納得がゆきました。人生を学ぶ意味でもこの機会を大切にして吟道を歩みたいと強く感じています。

昇伝審査会に参加して  
丸の内第一教場 橋本 静江

とうとう当日になり、会場に参りました。皆様の元気と活気のある会場の雰囲気にもつられて、井手先生のご指導を頭に入れ、何時もの練習通りに出来ればと、気張らずにと自分に言い聞かせて居りました。

いよいよ審査、部屋の中は審査の先生。井手先生の伴奏は暖かさが感じられ、一番目の安谷屋さんは大変落ち着いて居られ、私も引かれて吟じました。まだ一年にもならぬヒヨコですが、何十年振りに受験という緊張感を味わい、若返りの気分を味わいました。古希を過ぎて詩吟に巡り

会い、声を出す喜びを覚えます。人生一生勉強である事を実感いたしました。誘って下さった大先輩の稲垣様に感謝し、これからも可愛がられる生徒でありたいと思っております。今後共皆様宜しくお願い致します。

平成十五年度昇伝者（敬称略）  
おめでとうございます

中 丸の内第一 堀田 哲山  
丸の内第二 武田 弘山  
東陽町 前田 辰山

初 丸の内第一 青木 隆山  
丸の内第二 青木 洋山  
神田 大竹 霞山

ハザマ 町田 湧山  
丸の内第一 佐藤 甲山  
丸の内第二 木村 楓山

清水 溝口 徳泉  
神田 渡邊 笙泉  
ハザマ 佐藤 光泉

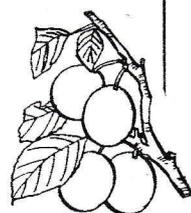
山本 山本 静泉  
和田 和田 神泉  
宮崎 宮崎 無泉

有馬 有馬 幸泉  
伊藤 伊藤 浩泉  
本田 本田 昭泉

池田 池田 幹泉  
越村 越村 梢泉  
緒方 緒方 泰泉

錬水

# 地区予選優勝三名 入賞六名



春の訪れを告げる吟剣詩舞道連盟吟詠コンクール地区予選が、三月十六日の港区を皮切りに廿一日の品川区、四月六日の川崎と開催され、千代田からそれぞれに総計三十七名が出吟した。

結果は、優勝三名、二位一名、四位一名、入賞四名と九名が実力を発揮して、榮譽を獲得され、千代田のレベルの高さが実証された。

内訳は、廿八名出場の港区で七十歳以上の三部で優勝渋谷辰山氏（東陽町）二位城戸稲山氏（ハザマ副教場長）入賞中川睦泉氏、遊佐梅泉氏、功刀蒼泉氏（ハザマ）と圧倒的な結果であったが、若手、中堅が出場の一部、二部では残念ながら千代田から入賞出来なかった。惜しくも入賞を逃した僅差と見られる方も多く、来年の捲土重来を期待しよう。

八名出場の品川区では、三部の林吾風教場長（神田）が昨年に続き優勝、二部では橋本淳泉さん（神田）が優勝と総合優勝を独占、菅原琴風教場長（丸女）が四位となった。

川崎地区では一人三部に出場の山手英泉氏（清水）が入賞した。橋本淳泉さんは総合優勝により来年の都大会へシードされた。

渋谷辰山、林吾風、橋本淳泉、城戸稲山、菅原琴風の五氏は五月の東京都大会に、山手英泉氏は神奈川県大会に出場されます。更なる健吟を期待し、応援しましょう。

全国吟詠コンクール予選を通過して

神田教場 橋本 淳泉

品川区連の吟詠コンクールに初参加し、思いもかけなかった大賞を戴きました。当日挑戦した人の中で一位になったのです。何と幸運！女神が微笑みをくれたのです。一位になることなど想像だにしませんから、当日はまるで他人事のように、ピンと来ませんでした。

しかし、重くて美しいカップを頂き、それを目にした小学二年生の孫から「厚子さん凄いな」と尊敬の眼差し。「うーん、悪くないなあ」この気分！幾つになっても出会った時、やろう！と思った時が「出発の日」なのだ。改めて自分に言い聞かせた。私は縁があつて吟の世界に入つて丸四年経過。初めの頃、畑違いか？と思う程戸惑いました。とところが仲間との出会いが嬉しく、学ぶことが

楽しく、次第に吟に魅せられ、熱心な指導者に恵まれ、コンクールの出場すること。コンクールの心得はベテラン教場長より細部に亙り指導を受けておりました。まだマイクの使い方などは難しいと感じます。私は新入り、駄目で元々、絶句した時は仕方ない。無心でいこうとリラックスしてました。それが案外良かったかも。

吟の勉強もやっとな緒についたばかりですが、ささやかな夢を持ち続け夢に向かつて存分に燃えたいと思います。ここ迄ご指導戴いた先生と先輩方の暖かい人々のおかげです。心より感謝しております。

独吟コンクールに出吟して  
東陽町教場 渋谷 辰山

この度、図らずも港区吟詠コンクールの一般三部で優勝することが出来ました。実は昨年出吟した時は、出だしからつまづいて結果を出すことが出来ず、捲土重来を期して来年も挑戦しますと「ちよだ十四号」に報告しましたのですが、ここで漸く常日頃ご指導、ご鞭撻下さった宗嗣会長、副会長はじめ多くの吟友のご声援に依る事が出来て、喜びと共に安堵の気持で一杯です。今回の課題吟の中から最初に私か選んだのは「独柳」でした。ところ

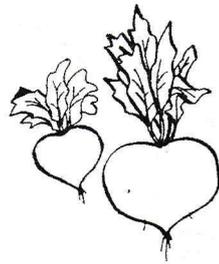
が一月の会長特訓の際「独柳」は繊細な女性心理を謳っている詩だから表現が難しい。「九段の桜」の方が陸士出身者として相応しいのではないかと、ご指摘を受けたのです。今なら間に合うかも知れないと云われて、その晩急ぎ和田精栄先生に電話してお願ひした処、間一髪間に合つて変更の手続きをして頂きました。コンクール終了時の審査委員長の講評では特に詩情表現の大切な事が述べられ、山の持ついき方の難しい例として「独柳」が挙げられました。自分に合った吟の選択が如何に大切であるかを改めて痛感させられた次第です。

三度目の正直  
清水教場 山手 英泉

飯田会長の気軽な一言で、ついその気になつてしまったのが運の尽きで、年初以来「董大に別る」に取付かれ、毎日のように「愁うる莫かれ」の詩文とは裏腹に、コンクール当日まで（特に川崎地区では千代田から唯一人出場ということもあり）憂え続けていました。

ところが何としたことか、会長、副会長を始め諸氏の力強い指導ご声援のお陰で、図らずも予選をパスすることが出来、改めて感謝の気持ちで一杯です。

今回の出場は三度目ですが、入賞の如何に拘らず、挑戦する毎に、一歩一歩吟力が、皆様のお力添えによって確実に磨かれていくことを実感させていただきました。更に県大会に向けて、今回の感動を忘れずに精進して行きたいと念じております。



うなずける委員長評

清水教場 井手 竹泉

三月十六日九時半、開場と共に第廿五回港区吟詠コンクールが開かれる御成門小学校の玄関に入った。

今迄は六本木の麻布区民ホールを会場としていたが、小学校体育館での開催とは、と若干奇異に思ったが、玄関横の表示石を見て驚いた。明治三年創立の鞆絵小学校他七校を統合した学校とのこと。まさに日本の文明開化時、全国国民教育の義務化揺籃

期にスタートした処。今は種々工夫された最新の設備を誇っていて、日頃小学校を覗いたことのない私にとつては大変珍しい感動だった。

このコンクールに入賞すれば、都大会、東日本大会を経て九月の全国大会への道が開かれる初めのコンクールである。幼年、青年、一般一・二・三の五部で全百廿八名、岳精流から三十七名（内千代田廿八名）の参加。皆日頃の修練の結果を精一杯披露し四時半吟じ終えた。

私自身は「峨眉山月の歌」で挑戦。練習中は詩句を憶えるのに苦労したが、会場では絶句することもなく「まあまあ」と思っていたが結果は落選。一残念。最後に審査委員長の講評があり「『峨眉山月の歌』を吟題に選んだ人が多いので、これを基に講評する。年配者が多いのに、出吟者は必要以上にガナリ立て、この詩句の詩情に添わない。又詩句の発音がはつきりしない人がある」と話された。考えてみると皆自分に適合する。落選が当然か。来年こそ頑張ろう。

千代田岳精会からの出場者の成績は、一般三部で東陽町の渋谷辰山氏が優勝、ハザマは城戸稲山氏が二位、中川睦泉氏、遊佐梅泉氏、功刀蒼泉氏が入賞と計五名の赫々たる成果。各氏の全国大会での活躍を期待するや切である。

「私の心に残る一詩」その十  
丸の内第一教場 伴 平風

やはり唐詩、そして李白。

「一詩」と請われる迷う。漢詩の世界は素晴らしい。特に唐詩となれば洗練された韻文形式、更にはスケール、奥行き、深さに加え、情（ころ）まで籠められて完成された域に立ち至る。この唐代三百年間に詠まれた全詩は四万九千首（作者は二百人）に達するといわれる。落ち着いたのはやはり「李白」。わが愛して已まぬ詩仙の七言絶句。

晁卿衡を哭す 李白

日本晁卿辞帝都 征帆一片遶蓬壺  
明月不歸沈碧海 白雲愁色滿蒼梧

吾等が万葉の歌人安部仲麻呂の遭難の報に接し、慟哭の情を詠い込んだ感動の一句である。

仲麻呂は養老元年（七一七）第三次遣唐使に選ばれ、長安の地に到達する（十九歳）玄宗皇帝から「晁衡」の中国名を賜り、その下で李白と親交すること三年のみ。仲麻呂遭難三年後の詩だが、終始親友の死を悔やみ、全編を通して涙している名句とすべきだろう。この絶句に接し得たのは詩吟の教場。得もいえず胸に迫る想いは未だ

深く消えるべくもない。転句の「明月帰らず：」のその月は、仲麻呂の「三笠の山に：月かも」の仲麻呂自身をそのまま擬して詠み込まれたのである。仲麻呂は代宗の大歴五年（七七〇）長安で死出の旅につく（七十三歳）。卒後、潞州大都督を追贈される。役二品であるから宰相（僕射）と同格であった。



### 詩歌研究会参加者三十名

新しくスタートの詩歌研究会（渋谷辰山リダー）が四月十五日に盛唐第一の詩人「詩仙李白」をテーマに第一回研究会を、明治生命食堂で開催、参加者は三十名と大盛会であった。今回は正副リダーが担当し豊富な資料を使ったの発表に質問も多く、関心の深さが伺われる。次回より指名された参加者が担当する事となり、更に期待が高まっている。

人物の多面観察に興味  
神田教場 福島 越山

手許にある解説書を速読して出席したが、「詩仙李白」の人物調査のなかで、渋谷辰山さんが、李白の遍歴した場所と詩、年代を一表にされた努力が強く印象に残った。何故かと云えば、李白の千五十首の詩のうち、五分の一度は時期が判明しているが、あとは判定し難いと解説書に出ていたからである。また、山口隆泉さんが「峨眉山月の歌」を前田道山さんが「独り敬亭山に座す」の解説をされたが、それぞれお人柄が滲み出てよかった。何故「李白」の詩は時期がハッキリしないものが多いのか。「李白」の詩は、天馬が大空を駆け回ると人々を驚かせるような空想力に富んでいる。詩をつくる能力、才能は若い時から晩年まで衰えなかった。絶句の名手だった。また、幾度も同じ場所に出かけているケースが多い。二〇〇一年、四川省江油市で「李白生誕千三百年の記念シンポジウム」が開催されたが、詩歌研究会の集まりによって、今後、大勢の千代田の方々による人物の多面観察が進むのではないかと、大きな希望が生まれた次第である。

# 清明の時節雨紛紛

吟楽部門こけら落し観桜吟行会

吟楽部門の初仕事となった四月五日は杜牧の詩「清明」その俣の雨紛紛、花見は中止となり、参加者は市ヶ谷宮崎県東京ビルへ直行となった。約六十名の吟友は「真善美」と岳精学生会詩、飯田会長の挨拶で、早速お酒と郷土料理に、女性陣心尽くしの差し入れも加わり早速話が弾む。程よく喉が潤った処で、吟楽部門町田湧山氏司会、演奏部門荻裕山、西川宗泉、前田達也氏の伴奏と新しい組織のメンバー担当で教場毎合吟、教場代表独吟と吟詠開始。批評抜き、の気楽さか、気分も乗って合吟は楽しく、独吟は豪快に、また華麗に披露されたようだった。

会長、副会長の模範吟詠も拝聴し、まだ吟じ足りない人も多い中、時刻が迫り、磯田副会長の中締めで終了となったが、そば降る中を、場所を求めて急ぐグループ、追い出されるまで会場で粘ったグループ。皆さん精気澆刺お元気でした。

教場合吟吟題

丸の内第一 汪倫に贈る 李 白  
丸の内第二 清明 杜 牧  
東陽町 鶴鶯楼に登る 王之涣  
清水 山中幽人と対酌す 李 白  
神田 静夜思 李 白

ハザマ 春夜  
蘇 軾  
錬水 春曉  
日柳燕石  
丸の内女子 清明  
杜 牧  
代表独吟

草加 寒梅 (新島襄) 青木恭子  
丸一 七歩の詩(曹植) 林 筑山  
丸二 胡隱君を尋ぬ(高啓) 野沢柳泉  
東陽町 酒に対す(白居易) 太田晴山  
清水 山行 (杜牧) 湯山申泉  
神田 汪倫に贈る(李白) 福島越山  
ハザマ 寒梅 (新島襄) 城戸稲山  
錬水 立山を望む (国分青厓) 岩本行泉  
丸女 百忍の詩(中江藤樹) 板橋和子

春の吟行会に参加して  
丸の内第一教場 安谷屋サチ子

入会して初めて参加する吟行会は“花に嵐”の言葉のとおり桜は満開で申し分ないのに強風に冷たい雨と、舞台装置も賑やかに揃ってしまい、楽しみにしていたお花見は出来ず、止むなく会場に直行です。

会長先生の開会のお言葉は「駅を出た途端に傘はオチヨコになり、帽子は飛ばされるし、幸い美人が拾ってくれたから良かったけど」と天候の凄さを早速に披露され、皆様の笑いのうちに会は始まりました。

会場は外の花嵐を吹き飛ばすが如く盛況で満員。圧倒的に男性が大勢いるのにびっくりしました。力強い

男声の独吟は素晴らしく、あとに続いた女性の美しい高音の吟詠が花に負けじと色を添えて、初参加の私はすっかり詩吟の素晴らしさ、楽しさを堪能させて頂きました。

吟行会を運営された皆様に、厚くお礼申し上げます。有難うございました。



星野久泉 <清水>

婦人部第二回着付け教室  
昨年引き続き若葉萌える名園で

昨年十月に続き小石川後楽園涵徳亭で婦人部の着付け教室が四月十九日開催されました。

部門リーダー菅原琴風先生の着付け教室、吟のお勉強、そして少し？お酒も入って、楽しい会食と十七時より三時間半、濃密な吟楽の至福の刻を持った参加者は十四名の方々でした。

秋には、第三回が予定されているとの事、婦人部の皆さん方、沢山の参加をお待ちしています。

【隨筆】

知覽

丸の内第二教場 八田 玉泉

廿世紀最後の年の秋、友人と南九州旅行で「知覽町」を訪ねる機会があった。我々の世代まではよく憶えている第二次世界大戦の末期、迫り来る連合軍の大軍から愛する祖国と、家族を護る為「特攻隊」として若い勇士達が肉弾攻撃に飛び立った陸軍基地の跡だ。「知覽特攻平和記念館」の正面に若い飛行服の隊員と、少し離れてモンペ姿の母親が見上げている銅像が建っていた。これだけでも胸に迫るものがある。

双発と単発の2機の特攻機、壁に隊毎に隊員の遺影、雲流るる果ての激戦の南海へ飛び立った若者は千三十六人、うち朝鮮出身者十一人、遺影の中に幼い顔が幾つも、何と十七歳。凜々しい笑顔だ、熱いものが溢れ面影が霞んだ。入場者は年代を問わず肅然と解説を聞き、遺書に眼をおとしていた。親に先立つ不孝を詫び、弟妹に両親への孝養を託し、悠久の大義を信じ殉じた若者達。彼等が、命を懸けて守ろうとした日本は確かに一流の経済大国として復興した。不肖我々もその一翼を担った。しかし現状は彼等の期待した

平和国家だろうか。何か重い荷を肩にずしりと乗せられたように疲れて外へ出た。建物の隣りの閑散とした赤い屋根の小さな特攻神社で、遺影と同じ歳の少年が一人、菊の花と線香を供えて手を合せていた。私も松口月城作「特別攻撃隊」「神風特攻隊を憶う」を献吟する。声が震えた。若き勇者の夥しい遺影の前に立つことを多くの日本人に勧めたい。



【新会員紹介】

野中 賢佑氏（一月入会）

当教場唯一、現職活躍中です。永年親しんでいる水彩画は、出張時にも小型スケッチブックを手放さないとのこと。その他園芸管理士の資格を持ち、庭園作業にいらしんだり、ゴルフに打込むなど、アウトドア志向の毎日です。

原田 政敏氏（一月入会）

若かりし頃、士官学校教官の美声朗々の吟に魅せられて、詩吟に親しんだとのこと。幅広い趣味）

中でも尺八演奏は都山流師範の腕前。その他ゴルフ、卓球、釣など年齢を感じさせない若々しさ汪溢の日々を過ごされています。

◇草加分室（丸の内第二教場）  
渡邊 千英子さん（三月入会）

草加分室の貸主さんでもある渡邊幸泉さんの愛娘、元三菱銀行華のOLで、目下花婿募集中の素敵なお嬢さん。若さ溢れる草加に更に廿代で八本の声加わりました。輝く新星と期待されています。

◆高橋 耀泉さん（丸の内第一）

平成十五年一月廿四日逝去されました。享年六十九歳。ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

暖冬の予測が外れて、早春賦の歌詞のような日々でした。その中で米英のイラク攻撃が行なわれました。根底に、宗教間の根深い憎しみが有るとすると、宗教心の薄い日本人には理解し難い物が有ります。聖戦とか、殉教など殺戮を肯定する教えは人類の為に有害としか思えません。全国吟詠コンクール、予選優勝者が三名と目覚ましい活躍でした。着実な会員増加で毎年昇任審査受審者が増加していますが、教室確保が厳しくなっています。（八田）